

講 演

歴史的対談を写す

水 戸 昭

これから、歴史的な池田先生とトインビー博士の『21世紀への対話』30周年』ということで講演がごさいます。私は短時間、前座を務めさせていただきたいと思います。

この世界的な東西の両巨匠がロンドンで、2年にまたがり、延べ10日間の対話をなさいました。すでに30年前の出来事ということになりますけれども、これは決して30年前のことではない。むしろ、これからさらに歴史的にも、また文明的にも、ますます光彩を放っていく、そういう出来事ではなかったかと思えます。

私は、報道カメラマンになりたい、という念願を持っておりましたが、聖教新聞社の写真局・グラフ編集部に入社して11年目になりました時に、特派員の命をいただきました。そして、ロンドンのオークウッドにある、トインビー博士のお宅で行われた対談の写真記録をさせていただいたわけがごさいます。

アーノルド・ジョセフ・トインビー博士という方は、ヨーロッパが“世紀の碩学”と誇る最高の知性のお一人であり、「人類の巨大な財産」とも評されておられました。池田先生からは「この対談は、将来、貴重な記録になる」、「この取材は絶対に失敗は許されない」と何度も言われておりました。正直言いまして、私にとってはそのプレッシャーと緊張感で、本当に死ぬような思いで毎日を過ごしました。

連日、「聖教」の紙面で使用する写真を伝送する仕事がありました。その上、写真のページ、同時に、当時の「聖教グラフ」、それに写真集も出版するということになっておりましたので、対談の様子をカラーとモノクロとで撮影するという仕事を、一生懸命やらせていただきました。

現在のようにデジタルカメラといった便利なものはごさいません。また、今日でこそカラーフィルムは、ISO800とか1600という高感度のものがありますが、当時は200とか100とか低いものでした。しかも、私が使用しましたものは、ISO100、50、25という非常に感度の低いフィルムでございました。

おまけに博士のご自宅は、他のヨーロッパの家と同じ様に、間接照明のため非常に暗いのです。しかし、池田先生は、博士がご高齢であるということで、大変、細かい気遣いをされ、ストロボなどの照明は一切無しで、何とか撮影、記録しようということになりました。そのため、照明には苦勞いたしました。結局、わずか500ワットのブルーのランプ一つという中で撮影をいたしました。

皆さんも、すでに何回もご覧になっていらっしゃるかも知れませんが、当時の新聞の記事と写真をパワーポイントで写し出し、簡単な説明をさせていただきます。

これは聖教新聞の一面の報道です。見出しは「池田会長、ロンドンに到着」となっております

す。「再会」という風にヘッドがございますので、1973年の対談の折のニュース（1973年5月17日）でございます。記事の中では、池田先生のことを「太陽を持ってくる男」と書かれています。あの「霧のロンドン」も、前年も、また、この時も、先生が到着されると、朝方は曇天だったものが、やがては晴天になったことから、地元のメンバーが先生を称して「太陽を持ってくる男」と表現したことなどが書かれています。

ご自宅に到着しますと、トインビー博士は、池田先生との再会を本当に歓声を上げるようにして喜んでおられました。「あなたと話をすると、私は、啓発され、感動する。本当の問題点を論じ合える人間とこのように率直に語れることは最高に価値あること、学者としてこれ以上の喜びはない」と歓迎され、対談が始まったのです。

次の記事では「会長とトインビー博士の対談二日目に」（同5月18日）という風に出ています。それによりますと、「白髪、長身のトインビー博士がメモを片手に深々とソファーに腰をおろす。会長も、博士の老体をかばうように、すぐ隣に座る」とあります。また、「窓外には、時折り澄んだ空気のなかをハトの飛び交う姿も見られ、落ち着いたふんいきの住宅街の一角、洋を東西に分かつ二人の哲人は、静かに、しかし貴重な一瞬一瞬を刻みながら、対話を進めていった」わけです。

博士と先生の対談された部屋の後ろには、大きい窓があり朝の光が差し込んでおりました。写真的に言えば、完全に逆光状態で、撮影には決して良い条件ではありませんでした。当時、イギリスにはSGI（創価学会インタナショナル）の会館もございませんので、この撮影したフィルムは、AP通信の暗室を借りて現像し、そこから東京に電送するという作業でございました。また、池田先生は「この写真をすぐに大きくプリントして、博士に差し上げなさい」と言われたこともありました。

博士のご自宅は、学問に関する以外の物は一切ないのではないか、と思えるほど非常に質素なお宅でございました。また、池田先生のスピーチ等の中でも何回か出てまいりましたけれども、博士は、6時に起床してベッドを片付け、朝食を用意して、9時になるとどんな時でも書齋に向かい、そして、研究に入るのだ、とこのようにも話をされておられました。

長い時間に及んだ対談が終わるにあたって、博士は仏法の“中道”を高く評価されました。トインビー博士は7ヶ国語が堪能ということで、特に、法華経についてはパーリー語、原語の梵語で読んでいらっしゃる、大変、造詣の深い方でございます。「私は、ミスター池田の仏法の英知から発せられる一言一言に、自分の学問の一切が整理されるし、啓発される」という風に語っておられました。

この対談が終わった後、池田先生は、ブライトンという町にある、非常にユニークな教育方針をとるサセックス大学を視察されておられます。そして、翌日にはロンドンからパリに向かわれました。到着したその日には、対談の大成功を称えるかのように、パリの上空に大きな虹が出ました。その時、私は、たまたまエッフェル塔に昇っておりましたので、この雄大な七彩の虹を記録をすることが出来たのです。そのため先生は、ロンドンでは「太陽を持ってくる男」として、そして、パリの友は「虹をかける男」を迎えた、と記事にあります。

フランスでは、ロワール地方に赴かれた際、「レオナルド・ダ・ヴィンチの館」を見学されました。その折、歴史に残るだろう池田・トインビー対談を、写真的に表現出来ないものだろうかと思っておりました私は、ロワールの古城の庭園で一枚のカラーを撮りました。朝露が光る広い芝生に二つのデッキチェアが並んでいる写真です。このカラーは『平和への旅』（第2集、聖教新聞社刊、1974年）という写真集の扉に掲載されています。

ともあれ、時代が経てば経つほど、対談集『二十一世紀への対話』は、その光彩をさらに未来の人類に広げていくことは間違いありません。この歴史的な一瞬を記録させていただいた私は、本当に幸せだと思っております。